

2016年7月に開催された「パープルタウンにおいでよ」（パープルーム予備校）において発表された作品《パープルタウンの風景》もまたリスト形式の作品だが、入れ子状であり、より複雑である。網かけが施された最上部に、ピリオドで区切られた2ケタの数字に続けて、いくつかの項目が示されている。1階には「4.0 Relative No.」「4.1 Town Name」「4.2 Medium Description」「4.3 Scale Description」、2階には、すこしインデントされた後に「5.0 Relative No.」「5.1 Institution Name」「5.2 Medium Description」「5.3 Scale Description」、3階には、さらにインデントされた後に「6.0 Relative No.」「6.1 Work Name」「6.2 Medium Description」「6.3 Scale Description」というふうに項目が並んでいる。校舎や集合住宅など、複数の階層に同じような「間どり」のある建物について、それぞれの部屋の所在を番号で表すときのように、ひとつめの数字は階層を表し、ふたつめの数字は位置を示していると言える。したがって、「Relative No.」以外の同じ項目は同じ位置に揃えられている。たとえば「4.2 Medium Description」のちょうど下に「5.2 Medium Description」が、さらにその真下に「6.2 Medium Description」の項目が存在し、「4.3 Scale Description」のちょうど下に「5.3 Scale Description」が、やはりその真下に「6.3 Scale Description」が位置している。また、すべての項<sup>データ</sup>は左揃えで記されており、それぞれの項目の真下に記されている。

しかし、「4.1 Town Name」「5.1 Institution Name」「6.1 Work Name」は——項目名が異なるからではないが——左端が同一でなく、各項を表示するセルの真上にも位置していない。これは、セルの幅よりも項目名が長いためである。たとえば「6.0 Relative No.」といった項目名は17字分の文字列であるのに対し、それぞれの「Relative No.」を表示するためのセルの幅は半角英数字10字分と狭いのである。このことは「6.0 : Relative No.」が305番と306番、および503番の——「printed matter」と思われる——文字列が「printe」で途切れていることから分かる。したがって、「4.0 Relative No.」と「4.1 Town Name」のあいだ、「5.0 Relative No.」と「5.1 Institution Name」のあいだ、および「6.0 Relative No.」と「6.1 Work Name」のあいだは、本来あるべき空白が与えられず、「4.0 Relative No.:\_4.1 Town Name」「5.0 Relative No.:\_5.1 Institution Name」「6.0 Relative No.:\_6.1 Work Name」（下線は引用者による）といった具合に半角スペースで仕切られているにすぎない。こうした妥協からは、リスト全体の体裁よりもデータの「大きさ」を尊重する態度を見てとることができる。

「6.0 : Relative No.」に続く「6.1 Work Name」についても同様に「大きさ」を観察するならば、セルの幅いっぱい文字列が広がっている項に着目すれば好い。はやくも3番目において「透

き通る。でも、台形の先端に。のし上がる実力を、じっくり溜め込む」という項が存在するが、わずかに次の文字の一部が認められるため、これも途中で切れてしまった項であると考えられる。このことから「6.1 Work Name」のセルの幅は全角 32 文字分であると分かる。この幅にちょうど収容されていると思われるデータは、542 番の「life」に位置する「（絵画をレディメイドという認識でコーディングした場合の経年劣化）」という「シール」である。この「シール」が、とりわけ重要な存在なので「6.1 Work Name」の幅を決定するさいの基準になったというわけではないにせよ、著しく長大なデータを除き、ほとんどの項を収めるために必要な幅を規定したと考えられる。

「6.2 Medium Description」においてセルの幅いっぱい広がっているデータのひとつが「6.0 Relative No.」575 番の「まっこい梅酒」に付属する「紙に梅・醸造アルコール・糖類・酸味料・香料・カラメル」である。おそらく「カラメル色素」の途中で切れてしまったのだろう。実際の商品を確認したところ、たしかに「原材料：梅、醸造アルコール、糖類、酸味料、香料、カラメル色素」と表記されており、これですべてである。「85mm×85mm×320mm」という「Scale Description」にしたがって計算すると、「パープルーム予備校」にあった「まっこい梅酒」を囲む直方体の容積は、およそ 2300mm<sup>3</sup>であり、紙パックの先端が三角柱のかたちに窄んでいることを勘案すれば、内容量が 2000mL の商品の存在と合致する。また、そのすぐ下にある 583 番の「わかめ・だし入り 油あげ」に関しては「ビニールに米みそ・砂糖・食塩・植物油脂・油あげ・わか」とあり、おそらく「わかめ」が途切れてしまったのだろう。「58mm×77mm」という「Scale Description」から推測するに、一包の粉末タイプの即席味噌汁であり、このあとにも原材料の列挙がつづく長大なデータであると思われる。したがって、このデータに「6.2 Medium Description」の幅を合せるわけにはいかないの、むしろ例外と見なすのが好い。ちなみに、こうした文字列から、「Medium Description」に与えられた幅は全角 26 文字分であり、「6.1 Work Name」のそれよりも短いことが分かる。この幅にちょうど収容されていると思われるデータは、701 番および 704 番の「スペシャル マットペンチング オイル つや消し調合溶き脂」に付属する「瓶に重合あまに油・石油系溶剤・特殊加工シリカ、乾燥剤」である。

無論、リストの形式だけでなく、データの内容も作品の重要な要素である。「4.0 Relative No.」において、1 番の「town」である「相模原市緑区」、同じく 2 番の「town」である「相模原市南区」の次に、3 番として与えられている「パープルタウン」も、やはり「town」として示されている。「4.2 Medium Description」について、「相模原市緑区」と「相模原市南区」は、当然「区」であるのに対し、「パープルタウン」は——これも当然だが——「タウン」であるという違いがあるとはいえ、相模原市は緑区、中央区、南区の 3 つしかないの、パープルタウン」が相模原市中央区のことであると推測することが可能である。さらに、「4.3 Scale Description」で示されている「パープルタウン」に関するデータは「36.87 km<sup>2</sup>」であり、これ

は相模原市中央区の面積と合致しているため、やはり「パープルタウン」は相模原市中央区のことであるに違いない。こうした情報は、ひとつの秘密でありながら、それと同時に既知のことからでもある。すくなくとも当時、「パープルーム予備校」の住所は非公開だったため、そこへ行くためには、まず「ゼリー状のパープルーム容器」で「パープルーム予備校」への地図を入手しなければならなかった。あるいは、あらかじめ所在を知っていれば良かったのだが、いずれにせよ、原田の作品を実際に見ることができた者は、「パープルーム予備校」の住所を知らされていたわけであるから、「パープルタウン」が相模原市中央区であること——あるいは、すくなくとも「パープルーム予備校」が相模原市中央区にあること——を承知していたはずである。

「4.0 Relative No.」が3番の「town」である「パープルタウン」の下位には、「5.0 Relative No.」が1番から5番までの「institution」が属している（付属しているのか所属しているのかは明らかでない）。それぞれの「institution」の名称は「5.1 Institution Name」において「パープルームの見晴し台」「ゼリー状のパープルーム容器」「パープルーム予備校」「パープルーム大学」「パープルームギャラリー」として与えられている。リストの大半は、3番の「パープルーム予備校」に属し、1番から754番までの「6.0 Relative No.」がわりあてられた具体的なもののデータで占められている。列挙されているものは、「4.0 Relative No.」「5.0 Relative No.」および「6.0 Relative No.」という座標系において、固有の所在地を与えられている。たとえば——恣意的な例示だが——「253: work アーギュメンツ」というものは、「4.0 Relative No.」が3番の「town」である「パープルタウン」にある、「5.0 Relative No.」が、やはり3番の「institution」である「パープルーム予備校」にある、「6.0 Relative No.」が253番の「work」である。

しかし、奇妙なことに、こうして具体的なものの所在を表す「Relative No.」は「4.0」から始まっているのである。「4」という数字は、そこが1階ではなく4階であることを示しているのであり、入れ子状のリストのまわりをさらに囲む、上位の行列の存在をほのめかしている。したがって、「1.0 Relative No.」「2.0 Relative No.」および「3.0 Relative No.」といったラベルを含む、さらに3つの階層が潜在していると想像するのが自然である。3階は、「相模原市緑区」「相模原市南区」そして「パープルタウン」（相模原市中央区）のすべてを含む上位概念をもつと推測されるため、「市」を表すと考えられる。同様に類推すると、1階は「国」、2階は「都道府県」を表し、「1.0 Relative No.」「2.0 Relative No.」「3.0 Relative No.」に付随するのは、たとえば「1.1 Nation Name」「2.1 Prefecture Name」「3.1 City Name」といった項目だろう。無論、これらのデータは、リストにある「town」すべてについて同一の値——すなわち「日本国」「神奈川県」「相模原市」——をもつので、分類として有効でない。もっとも、リストに列挙されているものは、すべて「パープルタウン」に所属しているのであるから、4階のデータも不要である。しかし原田は、3階以上の項目を省略しこそしたが、その存在を示唆するために、

そこにあるものをとりあげはしなかった「1: town 相模原市緑区」と「2: town 相模原市南区」および、それに付随する項を割愛しなかったのかもしれない。

一方、リストの右側には、それぞれのものに関係し、責任をもつ機関や人物の名前が列挙されている。こうした情報は、6階にあるもののデータに付随するのだから、7階の項であるように思われる。たしかに、その項目は「7.0 Relative No.」と表示されているのだが、しかし実際には、「7.0 Relative No.」「7.1 Agentgroup Name」「7.2 Relative No.」「7.3 Agent Name」といった項目が、4階、5階および6階に——文字の大きさこそ異なるが、3段に渡って——並んで位置しているのである。「Work」は「Institution」に所属し、「Institution」は「Town」に属しているのであり（ただし付随しているのではない）、「Town Name」が「4.1」、「Institution Name」が「5.1」、「Work Name」が「6.1」の項目であるということから類推すれば、「Agentgroup」に属している「Agent」について、「Agent Name」は、「7.3」の項目ではなく「7.1」の下位、すなわち「8.1」の項目であるほうが論理的であり、改行して表示されるべきである。しかし、原田がそうしなかったのは、これらのデータがリスト左側のそれとは別の位相に属しているからだろう。というのも、「大きさ」を羅列した左半分は「20141204\_switchpoint\_lighthouse」のシリーズに、「クレジット」を列挙した右半分は nadiff において発表した「エンドロール」に由来していると思われるのである。「7.0 Relative No.」「7.2 Relative No.」が、「6.0 Relative No.」のように通し番号ではなく、ものごとに数えなおされていることから、7階の——あるいは8階に属すべき——データが、リスト左側の階層を一貫しないことが分かる。したがって、入れ子状にするわけにはいかず、「建て増し」するような格好になったのである。

そして、網掛けの施されていない、項目も存在しないリスト中央部は、また別の制作に由来するのである。セルの大半は空白だが、データの記入されているものについては、いずれも「authorship」と書かれており、それに続いて「筆触」もしくは「筆跡」および「かき損じ」といったデータが認められる。このことから、この欄は、原田が「心霊写真展」や「作者不詳」シリーズといった匿名の作者による写真、および絵画における筆致の研究を通じて行ってきた「作家性 authorship」に関する考察に由来していると思われる。しかし原田は、とりわけ「authorship」の認められるものだけでなく、幅広く「work」という分類を適応している。形式的に示せば、パープルーム予備校にある全754点のものうち、「6.0 Relative No.」が1番から100番、109番、113番から130番、132番から251番、268番、308番から335番、414番から430番、432番から436番、438番から440番、504番から507番、511番、532番、557番から658番（658番は本来「music」に割りあてられるべきであるように思われるが）、688番から751番、および753番と754番の、じつに計467点が「work」である。このほか、101番のみが「caption」（captionのことであると思われる）、102番から107番、110番から112番、131番、252番から267番、269番から304番、307番、336番から414番（413番の誤りと思われる）、

441 番から 456 番、および 458 番から 502 番までの計 202 点が「book」、108 番のみが「leter」（ママ）、305 番と 306 番、および 503 番の計 3 点が「printe」、431 番、437 番、457 番、508 番から 510 番、および 752 番の計 7 点が「flyer」、512 番から 531 番までの 20 点が「manga」、533 番から 556 番までの 24 点が「life」、659 番から 687 番までの 29 点が「music」である。

こうした分類には、さほど作意がないように思われる。というのも、「work」のなかには、たとえば『アーギュメンツ』（253 番）や『ラムからマトン』（740 番から 745 番まで）など、むしろ「book」に分類するのが相応しいと思われる書籍や、それこそ「作者不詳」の日用品など、「life」に含まれるべき製品が多く含まれるのである。554 番から 557 番までの 4 つは、いずれも「Nostalgie Istanbul Orient Express」という「陶器」だが、上に記したとおり、556 番までの 3 つは「life」にふりわけられていながら、557 番だけは「work」にわりあてられている。ちなみに「Nostalgie Istanbul Orient Express」というのは、桃山陶器（現・桃山ホールディングス）社が、1988 年にオリエント急行（Nostalgie Istanbul Orient Express）のライセンスを取得して以降、販売している洋食器のシリーズで、なぜか広く普及している。「150mm×150 mm×20mm」という大きさから小皿であると考えられるが、筆者の実家にも、おそらく同じものと推察される皿が 5 枚ある。いくつかの分類上の不首尾は単なる間違いである可能性も否定できないが、決して分類が大雑把であるせいではない。つまり、あらゆる「work」が「book」や「life」の条件を満たすわけではないが、どんな「book」や「life」も「work」でありえるということが重要なのである。《パープルタウンの風景》は、「アーカイヴ」に関する制作に加え、「作家性」をめぐる考察までもが凝縮されており、集大成とも言うべき作品だが、「作品とは何なのか？」という問いに対する原田のとりくみは、いまだ途上にあるのである。

2018 年 4 月